



1 5
1198
3



門 45
號 1198
3

島田
藏書

6.12.23

但徠先生南留別志卷之五

門人 南總 宇惠 校訂

一大上皇の所を仙洞といふ
貌姑射乃山といふを
ハ嶠嶠仁明の比る
陽院子て久人を何う
とてまつらふあたふ
時子姑射

の山になつらるた処一ある
なる一

一む修り鬼まへ國をいふをい
るを鬼方を何念まけるなる一
一咀をこころよむ咀折の字な
れはちかふいふあまなりなる一
一関をせめく折をくもくもつ

類も持ちあはれてけりる洞の
やうなり

一罵をのゝよむに呪罵をいふ者
より起るそのやうなる一祝詞
そのいふ中臣被のるそのいふ
まふしなり法をのりそのいふも上
より起るそのやうなる

ハ神々人といふあまのふと祝も道
も加ふるなりとのちふといふ高野
みいふなり神の祝詞も上の作
せふも高野みもあまのふと祝も道
一見才をねといふいふハにねえそ
りふなる一

一望の山口をびやう一やうそいふとの

楽家よりて屏調ハ評歌なりと
あまのふといふあまのふと祝も道
凡上といふなりとの竹也の
竹ハ山口なりといふ高野也ハ双調
なりハ二竹をかきうて凡上の竹
より山口をひきてそれより降く
り外の竹も山口をへくるもハ

かき遠いぬきふらん上りなつてゐる
なりとの草に形長くなりてゐるあふ
えの竹やを山口を何きゐるなりと
の竹を長き限りやの竹をふか
まかきりてゐるのちうとを行
の山口をいとも行そのちうとを
凡の山口をす凡のちうとを上

山口をいんま上りのちうとをす
の山口をいやの竹を吹何きやてん
るなり

一里ちのちうとをいふやを秋あを
ちうとをいふ個の内き越の土角子
何きをのちうとをいふの山口を
秋あ何き平個のちうとをいふ

呂ちなるあななりといふも阿やま
なりまのあらといふハ十二律
の調といふなり一切のその
の秋を強にすえさるゝまで秋子
をちなるあな―呂といふ
歌子もちひされなり

一長歌短歌といふといふハ

とくといふさぬのちうた
―もあていなるなり
たかたうぬなる―

一大口といふものハ舞人の装束子
大口袴といふもの隋唐の樂志子
る

一たといふハ歌の音といふなり

かりうのいふる言ふいふのちなり
久しうに物名をなかりしれいあとの
きる金のちりもいふなり冬日之
日夏日之日といふなり
一ちとふに祝するといふなり
壽命のふり思ふに博士家のあ
やまりなり

一ち邦をて大宰といふに大鹿小鹿
猪なり

一とのせにきき堂坊を掃除坊をき
といふ物のあるなりと戦國の時
軍兵も領を及取し僧徒をわす
め取てたのうはひひものといふ
なるなり 國のちもても僧の

さなまうーあひるハ大名の
掃除坊さうきりされも廿
肉食をやすれのれ、都居ま本
るをすゑにきてひろうよ朝夕の
勤行をもさうりき外祖母の法
一令に僧の罪をわゆるをたは
派のさうて百日苦役するやう

る者を見やれこりなる無
一相を教録さうありぬ木さ
洞智さうきりよえまとのけり
つてんきんさうけるに
かよひて禁束をさうきり
さうていさうきりとのさ
さうきりさうきり相ハさうきり

らぬといふ事あるを―カゑま
とふ字と書く事かくも倣
なる―胡瑗も教録は大政入
るなるの事有強ある比の事ある
―
―の世にさなる事といふ事
とふ事のお事有なりされども清倣

なり三代実録に記はるの事ある
りも倣にほするものもあつた
りといふ事あるものなり
親戚の形ひて流子の籍貫に入
るて良家なりといふ事ある
はる事といふものもあつた
ぬ婢の事あるものもあつた

あるなる一それうはみは奴を
うまて法師に似るう近きむを
なりて清僧にありけるなる一
諸山諸寺の妻帯の僧達も百年
以来多く清僧にありけるなる一
一大内家の遺物ありて孝孺に
おきて邦曲のちをんやつ宴曲

集む巻宴曲抄三巻真曲抄を巻
究百お一卷拾葉集二巻拾葉おを
巻別帝追加一卷玉林苑二巻熱目
録を撰西の目録といふ久保の比より
庶永の比よりに比するものなり猿
樂さうになりては極なる物も
うせけるなる一

一 朝廷の職といひ武家のを役と
 いふはとも異國より來りし侍
 老職役といふ詞は友まがきて友
 人のけうさともを職といふまのつ
 りさともを役とするなり
 一 能いえの雜劇を擬して作る
 なりえ俗の來りてあつるなり

一 これをうりのりもけ國の人
 のうつらけり出やるをけまては
 何らうか
 一 ちうくたらをやらううきつ
 ち樂の譜なる一絶を左なり
 一 さいるいぬるなり
 一 ちんちんめりなり掃部ハ階

めりありて水はうつめり清く
もどりてあるそ来女いふひめ
るー
一編幅をかかりそいふに清り
なるーやめりぬめりのそある
ー
一鼓とけいこといふに都曇鼓

一鼓阿るより木くねるなるー
一隼人をいそそちめるはをい
るべと略ーるなるー
一黄葉派のもいからめさくれも
古に遠ー素言天名のもまは
和流多けれぬめとて座敷より傳
ふれは古きのはゆるとて

一異國のちり入道といふは道
 士なりける多し其邦より
 僧にありけるといふ法師もあ
 なり
 一勾峽をまかるとよむ酒匂を
 さくともよむまかるといふより
 まかるといふなり

一ねこ海を眺めてねこといふには
 ねこも略なり
 一地名尾といふは丘の字なり
 一梶原平三子と源太といふ源
 氏の子とやあるや猪俣小平
 六も小野氏あると平氏を冒せり
 いふけはまてはらのせのんり

かりきやうになあうゝかなうす
ゆゑあるゝ
一武者ふゝいゝ官府の名なるゝ
律書不記厨子不記録不の類なる
一兵家者流の輩の六十六箇
國子武者ふ三十三何りやういゝ
④と誤するなるゝ

一とのせに乱曲といふ物有宴曲
志曲の類なるゝ一謡曲舞曲といふ
物あるものゝ宴曲志曲の類に
あはせたりるなるゝ
一代官といふものゝ國子なるもの名
代なるゝ一戰國子なりて又官を
ひりりするよりとを輕き職

水にちりし

一、**藤原**のいふくは、**室町**の比を
越え、**里**の代り、いふれく、**佐**
河、**ち**、**い**て、**和**、**田**、**も**、**い**、**い**、**と**、**浦**
も、**称**、**し**、**お**、**は**、**奈**、**も**、**の**、**り**、**し**、**を**
大、**平**、**記**、**の**、**比**、**よ**、**里**、**何**、**ら**、**ぬ**、**國**、**り**、**佐**、**な**
から、**仁**、**木**、**細**、**川**、**佐**、**木**、**な**、**と**、**い**、**ひ**、**り**

(5)

是より、て、**た**、**の**、**つ**、**から**、**子**、**姓**、**あ**、**か**
ら、**れ**、**ゆ**、**れ**、**る**、**も**、**り**
一日の神の、**乙**、**盤**、**戸**、**に**、**あ**、**り**、**た**、**ぬ**
い、**し**、**と**、**い**、**日**、**食**、**の**、**る**、**なり**、**諸**、**神**
の、**神**、**采**、**を**、**奏**、**せ**、**し**、**と**、**い**、**日**、**食**、**を**
お、**り**、**さ**、**さ**、**る**、**し**、**し**
一、**と**、**の**、**お**、**さ**、**ひ**、**る**、**葦**、**の**、**假**、**名**、**を**

一字に用ゐる阿字假名のやうなる
るハ異國カモ阿るるなりを修
の稱呼して字メは阿ラハ五邦
の人ハ字メなりなり字ツクン
一馬ノ人ハ別にツクンマサハ
一瓜ヤウリヤハクムハ壺盧ヤ
遠ツくるカヤ壺盧ノ唐ノ名

なりウヤハアノ名ニハヤ
ハクムハ一ハハハハハハハ
ナレハハハハハハハハハハ
一孝標ハハハハハハハハハハ
の國ハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハ
一甲斐の國に火よりハハハハハ

王が去て神を名づく日本武尊の
よこゑある歌の下の方にはま
れハ和歌のまといなる一國は
神なるといふ神といふなる一と
いふやまりてハ幡をて神とい
まつ此里の王たに山梨國の
明神社の前に綿をかきしる

やうなるふも甲斐といふなる
や祝のいひー甲斐の巖といふ
ういふといふもて甲斐の國
の根本なりといふて傳へる
なり

一上徳國に日蓮宗の一經ありとも
僧もなりて土民のいふなり

なりかゝるをさるるよりいんかき
日蓮宗一向宗なるものたりける
ちめこなかふさぬなる一
一國に富生みその里の母子
兄弟の百あり婚姻をなすといふ
平家の餘類なる一敵をさけて
人の通りぬあり隠れたり子孫

長しとておのつらに一族の
かゝ婚姻すき族なるをいれ
里のちとちなるをいれ
一を邦に女多く需すなりといふ
さもありぬなりかのうまをいれ
かく需のうまをいすなり人の
妻女のひにるをきくなりといふ

①

なり人別の帳といふ物をくはし、珠
 にめつちなりさし、くも陽いすくな
 く陰い多記抱なれ、異國もかく
 阿多ー、思ひる、女すく、なりや
 はせ、み、る、魚記なり
 一、六百年来、あけり、百年、以来、烟草
 阿り、せ、い、や、う、居、く、に、す、多、く、なり

②

ぬ佛きも古いなりなり
 一、遠江國、い、ま、あ、の、この國なりと
 一切の、海、の、き、い、さ、り、い、あ、い、湖、なり
 一、石、津、國、い、農、國、い、道、の、た、り、み
 き、ま、い、い、や、う、なり
 一、今、と、い、れ、い、古、の、葬、い、鼓、角、を、用
 なり、三、代、家、録、い、は、あ、相、の、り、り

僧は借らぬやうなり

一檢非遠使の教をかくるはとの閉
門なりとの子贖をもちるがきり

門なりき子賁をたふるかきり

閉門するなる

一 寛永通宝の行りしきるあは錢に
美惡何りて多きに何るるをサ
起し何る者りや祖母のかしら

美惡何りて多きに何なる有る哉

起子何る者よりと祖母のかしら

たゞひー明の法なるー永樂

ちのす 収税の法を定めしむるを

國子まろせゐる子阿きくらかなり

一、ちよ三尺の御堂の二尺一寸

わらなり普通
みはよ
起るよ
の年

比ちりハ極の細も大なる回一也

ある

いふくはち酒池をけむくひを
一儒者のかしらるるハ怪寫より
たしまりて僅み六七十年のる
ちりえ祿のびより皆むしにかへ
されどの人を儒者のかしらるる
しをさるぬ人も多し醫者のか
しらるるもかふくちなるし記

録しるおちきれ人々昔より
のりや馬のあまに醫志のいふ
しきものあれがしらるる便な
る閨門のゆあも出入るるさる
あれはうしなるるよれなるし
ちり習俗人のいふくも多し
おちりり

一高泉の異國より持来り母の
 神より長金孺人神とて題せ
 るる泉に記ひ一僧のかり
 止者み戒名はるる異國をも
 記すなり佛法をもなる記すなり
 一ちんハ吊灯なり挑灯とかく
 ハ倣りなりつるハ吊籠

6

一ふとるおもむきのうまの教
 生ふとるきこふ僧の名を
 せるハ遠つかり人の習俗なる
 このせにありてハ示派する
 まるにさいひハあるなり大
 幻法門なりやふもまことなり
 一療病とくおもふハ山砦河

帯の折ぎやちやふれゝぬきよんぬ
やまうて折るゝ人の神祇は
飛やうけける痛き傳ふ
する人ありゝぬぬゝゝに
ちやふぬゝゝにちやうぬゝゝに
ゝよりゝゝにちやうゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

⑤

とちゝゝゝのちやふゝにちや
のちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ちゝのちゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ちりいり大木に羽まゐる

里

一

in the way of

the

the

南留別志卷之五終

和歌世話



但徠先生評門人南總宇惠校訂

ふみり子うきまよひたの里

さゝあふのなもみふるまひ

かきとあふーも

君ちもせふあつたな

乃んちまはりあのちるる

ふやあらそちのちの
るにや阿曇

白く目の黒くち刀をさき
きてあらけ都を福もやた
り

人なりともはるのちや
うもるいりて乃と

あ乃習いちのま才もは
とちうきくもまの
きからちちてあ
たをいすくも
うれくもく
くちすくふも

新古今和歌集

終まきうううにーた中
うえちん

おのうはーたきすけ
てんきとねるうゑ子の
んえちんー

班鳩や富猪川のうえんお
そり方おのり名はえね

氏のかきいねえちん
おちーひねるちんのか

ーちん
足引乃ひるの尾ねちん
若ちんーねをひるも

ねん
おのほか氏も多からん

さるる申る

不ろくさあふーの浦津
新霧りきぬあふゆふ
とそわふ

古乃人に別を惜むるも
のゝちかりにさるるあ
るあふらぬあふけふれ

あふかちるにあふのふあふ
はかち

うらふらぬあふあ
らーかー

あふあふあふあふあふ
中におぬあふあふあふ
るうら

古くもあ乃歌のやうは
いふらあやうなるは
いふや
百あの大も人いふあ
やさくもいふも
あは

いふのちせなるもいふ

うけはを何みし
衣袂ゆいふいふ
いふいふいふ
いふいふいふ
あはあはあは
歌乃云のあはなり
いふいふいふ

何ささるみかかの志はく

仙人の歌なる一

和田能原の千鳥の鳴る

けぬ人なすはあは

能なり

桐正通より久きやう

ちの栗

あはれは都れうんえうす

むせうち山々人いなり

喜樹をすめるをれ流民

ちの栗

梅乃花れもえすひ

うにえあるを乃ちうて

あはれ

いあておねらちち折る
ちあていあていあていあて
ちあていあていあていあて
すちあていあて
月秋より秋より人子け
屋らはちあていあていあて
すちあていあて

あくあていあていあていあて
ちあていあていあていあて
いあていあていあていあて
らあて

あくあていあていあていあて
ちあていあていあていあて
いあていあていあていあて
すちあていあていあていあて

乃神ありて人の初らん
つらんあつらん
あつらん

梅つるこり袖あけにぬひそ
きまもやむらゝ乃ぬりそハ
そや

右伯望子方女阿之伯夷

おねのくにちうしんおね
 むろーの人みねのふらり
 になつらんぬるかきま
 人もあひあるいさぎ
 地人をうつむすによめる
 い識めくられるゆゑなるう
 阿られもいのまへにわあ

つと 倭島紀人抄を
る乃あり

百あやうの紀軒端の刃つゝ
 とるやあやうの里阿の昔なり
 臣の歌なりせえと思はる

つゝらゝかゝる人阿ら大須磨
乃うらまゆふれはまを
うらよ
阿らぬひをいひるやうな
るゝこのすかゝちなる
君ちうてこれかゝる人梅云
るもあまもある人うら

世にけしきと能くても
 ありけしきありけし
 埋木に心嘆しもちなるに
 多のちなるにありけしなる
 はしきとよきてけしなる
 きん人いけしなる
 櫻心嘆しけしなる

らちのこ
ほのきみさきさき
あかほのこ
これ
あまのふはなう
そとわたりく
いふてはめいすまて



あまのこ

和歌世話 終

世稱博物多聞无所不至也
然非識無能濟其博何也張
華之博物居於百歲之下而
知於百歲之上能辨漢宮之
制於已墮之後至望斗間徒
知為異氣耳非遇雷煥為純
得干將邪故問典故而知之

博物之人或能爲至見今以
知古聽彼而悟此非識者則
不能矣徂徠先生之於經術
以穎邁之才通貫古今之典
籍闡聖學於千歲殆絕之後
其發微顯隱古來所未聞也
又其所旁及意匠之所趣而

懸於世之所疑者曰南留別
志是特緒餘耳然自此有見
今以知古極彼而悟此之識
縱使博物如張華徒望斗間
之氣茫焉而已矣何以能
懸斷之爲將亦縱使識如雷
煥果能通貫古今之學何以

能得其所以惡之由邪故
張華必遇雷煥而後得干將
矣博與識會而後有此書矣
雖是先生之緒餘不可不傳
也竊笑世之狡佞子弟以斗
筭自許穎邁之才以狹學自
列博物之偏往之爭效擊既

無張華之博物亦無雷煥之
識則其所為甚穢滿目猥偶
有博物如張華至識如雷煥
不易得則此書之不可以續
也必矣

寶曆壬午之冬東都平好古撰



新岡源師道書



寶曆十二年壬午正月
東都書林 村田小兵衛

東陽書林

林田

寶曆十二年壬午五月

丁

一初
人部
改裝
川十

